

「本当の百姓」の実像と悲しみを伝える人

和田文雄『宮沢賢治のヒドリ——本当の百姓になる』

に寄せて

和田文雄さんは、物静かな紳士だ。いつもひかえめで私の強い詩人達の中でも、超然として静かに微笑んでおられる。私たちの深層に眠る古代人の暮らしのリズムを内蔵させた稀有な詩集『毛野』を書いた詩人は、詩を批評することよりも、詩作することを中心とした根源的な詩人であると私は敬意を抱いていた。私は次に引用する詩集『毛野』の冒頭の詩「言依さし」を読んだ時に、古代人の暮らしに内側から入り込み、詩にしてしまう詩人がこの世にいると正直驚いた。和田さんはよほど地に根を張った生活をされていて、歴史や古典に通じた学識を持った方だと思われた。

人の立ち歩けるころの初め毛野に

地に芽を刈り織りなし被覆とし芒衾とし

染め分けて おみな おのこ

汝と呼び 女とめ

堅穴に火だねを点し

炬をきりて炊くほのお 燃え

粟きびの煮られて懸かる

も安西均のように思い込む詩人たちは多い。しかし和田さんはその常識をくつがえし、賢治がその「ヒドリ」という言葉をどうして使わざるを得なかったかを実証的に探求した。この書が研究書の域を踏み越えているのは、和田さんの賢治への畏敬と賢治のように百姓を目指したあまたの賢治的な「ヒドリ」たちへの共感であったろう。和田さんは照井謹二郎への賛同だけでこの本を書いたのではない。自らの出自とその後の経験のすべてをかけて書き記した。和田さんは一九二八年に多摩川流域近くの農家に生まれ、子供の頃から農作業を経験した。また戦後の農業行政に長年関わっていたため戦前戦後の農民たちの実態にも詳しい。詩作の中心テーマも各地の土着の風土や言語を取り込んで書き続けてきた。その意味でこの本は、和田さんだからこそ書けたのだと読み終えた後に感じた。和田さんは十二歳の時に賢治を読み始めたという。それから半世紀以上もかけてこの賢治論を書いたといえるだろう。

『宮沢賢治のヒドリ——本当の百姓』の中心テーマは、賢治の手帳に記されてあった「雨ニモマケズ」に出てくる「ヒドリ」が「ヒデリ」の誤記ではなく、賢治が生涯を懸けて実践をした「本当の百姓」になるための重要なキーワードであるという考えだ。第一章「花郵帳々 一 山折哲雄さんへの手紙」で和田さんはなぜこの「ヒドリ」説を自らが本にするまでに探求しようとしたかの動機が書かれている。宗教学者

これ毛野の初めのこと

女と汝の初めのこと

親 御祖遠くみあれしころ

見合われしところ

甘野老を掘り花に風を聞き

いら草のいらいらをしずめ

御祖 双び毛野に一代をつくる

(「言依さし」の前半部)

そのような詩作だけでなく和田さんは、原稿用紙七〇〇枚を超す宮沢賢治論を三年もの時間をかけて書きおろした。その内容は「ヒドリ」という賢治の使用した言葉を徹底して探求している。一九八九年に賢治の教え子の照井謹二郎が賢治手帳の「雨ニモマケズ」の語句の「ヒデリ誤記説」に反論し、「ヒドリ＝日取り」説を主張し原文に忠実に戻すことを提唱したが、その説は賢治の研究者や関係者たちの多くに受け入れられてはいない。私は一九九〇年頃、「詩学」の詩誌月評を一年間読んでいて、この照井謹二郎の「ヒドリ論」を紹介し、賢治の教え子の言葉に真摯に耳を傾ける必要があると書いた。すると同じ「詩学」で名コラムを書いていた安西均は「ヒドリノトキハ」と「サムサノ夏ハ」は対句であり、賢治の詩人としての遊び心であり、それ以外は考えられないという意味のことを、後の「詩学」三月号で記していたと思う。今で

の山折哲雄さんの「雨ニモマケズ」に寄せた講演などを聞き、「ヒドリ」に言及してくれるだろうという期待を持っていたが、一番聴きたかったことは果たされずにその思いは裏切られてしまう。賢治の「デクノボー」精神を語りながら、なぜ百姓だけでは暮らしていけず「ヒドリ」に出かけていかねばならない大多数の百姓の存在の悲しみを語ってくれないのか。その時に和田さんは自分で明らかにするしかないと感じたのだらう。

和田さんの「ヒドリ」論は、「ヒドリ」という言葉は方言ではないと次のように歴史的に論じていく。

〈南部藩では公用語としてつかわれていた。領民が誰でも使っている言葉で藩政の伝達指示をすることはその効果をよくする。このころは漢字、漢文、候文で通達や記録を書くから、庶民一般には理解しづらい。「ヒドリ」は「日取」と書かれた。いまは「手間取」とか「日手間取」とか使われている。また、「日傭稼」とするが「ひやとい」の人夫として説明される。もとは庸で籾を落とす用(器)にいれる意味があり、籾(米)の収穫に働くことで、労役や租税の「庸」であり人偏をつけてやとわれ人とし、さらに賃金、錢傭、傭役、傭兵、傭耕(作)としてつかわれていた。さしずめ現在の勤め人、勤労者のことである。カタカナでサラリーマンと書いてみても、もとは籾を落とす人夫のことであり、食物である米を作るための、土地持ちや、百姓仕事の人夫不足をおぎな

う労役を意味している。端的に言い表しているのが銭傭であるが好まれて使われてはいない。カタカナでホワイトカラー、サラリーマンと書き替えてみても、その根源と御先祖様は庸であり傭の人であったことになる。』

この引用だけを読んでみても和田さんの論は、歴史的に意味あることだけでなく、今の現代人の低賃金や雇用不安を抱えている勤め人たちにも通ずる説得力を感じるのだ。

今年（二〇〇八年）の賢治祭（賢治の命日、九月二十一日）に私は、宮沢賢治学会イーハトーブセンターから長津功三良さんと山本十四尾さんと一緒に招待された。『原爆詩一八一人集』（日文、英文）の三人の編者が「イーハトーブ賞奨励賞」を受賞することになったからだ。授賞式の前日の夕方から始まる賢治祭のために、ホテルに車をよこしてくれた。賢治祭は毎年、「雨ニモマケズ」詩碑の前で開かれているという。賢治が独居生活を始め、羅須地人協会を設立した場所、細い林の道を抜け高台の背の高い松などに囲まれ、今は建物は他に移されて広場となっている。詩碑の下には賢治の分骨された遺骨と法華経と全集などが埋められているという。夕暮れ時に参加者達が献花をし、詩碑の左右に篝火が南城中学校の生徒によって設置・点火されて舞台は出来あがったのだ。まず南城小学校四年生の六十三人の合唱から始まった。次に花巻農業高等学校三年生の市原末美子さんが「雨ニモマケズ」の朗読をした。市原さんの声は、高校生とは思えないほど落

花巻南高等学校演劇部の「ピアノカ吹きのコージュ」にも驚かされた。賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」を脚色した劇だった。ピアノカが下手な高校生が独り公園のベンチで練習を続けていて、友人たちが代わる代わる教えに行くが少しも上達しない。演奏会まで日にちも無くなり、絶望的になりかけていたところ、身体が震えて体調がおかしい女子高生を連れて二人組みがやってきて、ピアノカを聞かせてほしいとせがまれる。なぜならその下手くそなピアノカが心を癒してくれるという噂が流れているからだという。その音色を聞いて病状が持ち直し二人は帰っていった。下手なピアノカ吹きの高校生は自信を取り戻し、演奏会もうまくいったという劇だった。高校生たちが賢治のユーモアを受け止めて自分たちなりの演劇空間を作って感動を与えてくれた。私は賢治を継承するとはこのような行為を大切にすべきだと痛感したのだ。

賢治祭を支える多くの賢治の精神を継承する人びとと同様に、和田さんの「ヒドリ論」は有力な仮説となって賢治の知りえなかった深層を照らし出してくるだろう。天候に左右され日雇いや出稼ぎに行かざるを得ない「本当の百姓」の存在を直視することが、賢治の理解にとって重要なことだと問題提起している。賢治から影響を与えられた人びとの紹介は、賢治の限界を見据えて賢治の継承を模索・実践したことに和田さんは敬意を払って詳しく論じている。現代の「ヒドリ」

ち着いていて、淡々と低音で賢治の晩年の崇高な精神に寄り添うように朗読された。たぶん数え切れないほど練習をされたのだろう。普段の女子高生らしい高音での朗読もしたことだろう。けれどもこの低音の朗読を聴き、賢治の「デクノボ精神」が乗り移ったように「雨ニモマケズ」の詩が大地から胸に沁みてきたのだ。賢治の精神を引き継ぐとは、この場所での詩を若者が自らの解釈で自らの言葉として朗読することから始まるのだろう。

しかし私は、一点どうして気にかかるころがあった。それは「ヒドリ」ではなく、「ヒデリ」と読まれていたからにほかならない。和田さんが宗教学者の山折哲雄の朗読で感じたような、何か物足りない違和感を私も感じた。関係者にとってもこの「ヒドリ・ヒデリ」論争はこれからも頭を悩ますことだろう。しかし私は「ヒドリ」と読んでもらいたいという願いが心の奥深くから湧き上がってきたことも事実だった。それはともかく花巻北高等学校合唱部の「星めぐりの歌」などの合唱、花巻詩人クラブの伊藤諒子さんによる方言詩「松の針」の朗読、地元の桜町四丁目の主婦たちの「牧者の歌」などの合唱などは賢治の精神が今も息づいていることを実感した。また特筆すべきは「岩崎鬼剣舞保存会」の十人ほどの鬼剣舞だった。勇壮でありながらユーモアも感じさせる篝火の下での神秘的な舞だった。縄文時代からの数千年の土着の人びとの存在がこの場所に現れているかのようだった。また

の悲しみを生きている人びとにこそ和田さんの『宮沢賢治のヒドリ——本当の百姓になる』を読んでもらいたいと私は願っている。新しい賢治の鉱脈はこの「ヒドリ」というキーワードに託されているのだ。「ヒドリ説」の賛同者だけでなく「ヒデリ説」の多くの方にもぜひ一読を勧めたい。賢治が目指した「本当の百姓」の実像を直視し、そこから賢治の真の姿がたち現れてきて、世界の中で苦悩する後世の者たちに賢治が勇気を与えて、彼らの中で生き続けるだろうと思うからだ。